
第一三一話

酒顛童子退活事 上

『前太平記』上 卷第廿 三九八頁から四〇九頁より

[酒顛童子の下僕道案内す]

夜もすっかり明けたので、頼光・保昌・四天王らはお礼の幣帛を捧げて、神前を離れたが、前に進むべき道が分からない。樵・獵師のようなものでさえも出会わないので、尋ねられる人もなく、一体どうしようかとあれこれと思い悩みなされたところに、怪しい男であわてて道を急ぐ者が、皆さんの前を横切って通った。綱、近寄って、「もしもし、貴方はどこへおいでになるのですか。私たちは伯耆の大山へ参る者であるが、この山道に迷って進退がなくしてしまった。出来ることなら道案内をしていただけますか」となれなれしく頼んだ。その男は、目にとめて、「なん

然るべくは道指南して

給はり候へかし」

だって、廻国修行の旅の僧だというの

「何 廻国行脚の客僧とな。

かね。気の毒なご事態ですな。道さえ急がないならば案内して差し上げるのに、頼

痛はしの御事かな。

道だに急がずは案内して進らせんに、

みとした人の方からの、緊急事態を申し伝える使いであるので、どうしても願いを

憑みたる人の方より、

事の急を告げ知らせ進らす使なれば、

何にも叶ふまじく候」

叶えられません」と、いったまま返答も待たずに駆けていくのを、綱が一途に呼び

止めて、「そこをなんとか。知らない道に迷うことほど、世の中に辛いことはござ

「さればとよ。

知らぬ途に迷ふ程、

世に憂き事は候まじ。

いませんでしょう。ああお連れしてくださるならば、出来るだけ力の限り歩いて、

あはれ召し具し給はゞ、

随分足を限りに歩みて、

邪魔とはなるまい。このような人の足跡が途絶えている所で、出会い申し上げるこ

妨げとは成るべからず。

斯かる人跡絶えたる所にて、

出合ひ進らす事も、

とも、そうなる運命の巡り合わせであろう。案内してください」と六人の人々が

然るべき値遇ならめ。

導きて給べ」

口々に申し上げられたところ、男はひどくねだられて、「不躰な旅の僧たちの物の

「骨なき客僧達の物の

おっしゃり様だなあ。それならば歩いてください。十分注意して、後ろに下がり私

宣ひ様やな。

さらば歩み給へ。

相構えて、

跡に下がり吾ばし

なんかを恨みがましくお思いになるな。急いで参る道であるので、わずかな時間も

怨み給ふな。

急ぎ罷る道なれば、

一足も

待ち申し上げることはできないぞ」と言って、先にたって歩いて行く。全員はとて

待ち進らす事は有るまじきぞ」

もありがたく思い、遅れまいと速足で踏み出して歩かれた。保昌が申し上げられたことは、「どのようなことがありますと、このようにお急ぎになるのか。どこからどこへお向かいになる」。その男は、「私はこの山の奥に千丈が嶽という岩屋がございますのだが、すぐにそこへ参るのである」と言うと、六人は目と目を見合わせ、「あ、夢の中のお示しはこれであるようだ」と心強く思って、いっそう加護を

「すはや夢中の示現是なめり」

と憑もしくて、

弥擁護を

施してくださいと、それぞれ心中で願立てを集中しなされた。頼光は、「先ほど緊

加へ給へと、

各心中に祈誓を凝らし給ひけり。

急事態を告げる用事とお聞きしたが、どんなことでおられるか」とお尋ねになったところ、その男は皆さんの顔をじっと見つめ、承知しないように思ったのだろう

意気ず気にや思ひけん、

か、事情を説明しない。保昌がもう一度、「このような山の（外界から）ひどく離れている道を、何も話さないで行くことは出来まい。まあまあ、そこまで隠しなされるな。私たちはご覧の通り、廻国行脚をして仏道修行を目的とする身であるので、たとえどんな秘密を聞いたからといって、人に話すはずはない。何が不都合なのだ

ろう。話してください。旅の辛さを忘れ申しあげよう」と欺いたところ、その男が
申し上げることは、「なるほど貴方方は、遠慮すべき方々でもいらっしゃらないの

「実にも旁々は、心置くべき人々にても在さねば、

で、話し申し上げよう。決して他人にお話になるな。私は丹波国大江山の鬼の城に

語り申さん。必ず他人に明かし給ふな。某は丹波国大江山、鬼が城に

住みます者であるが、この山奥の千丈が嶽という所に、その城の主人・大童子と申

居侍る者なるが、此山の奥千丈が嶽と云ふ所に、彼城の本主大童子と

し上げる人の元へ参るのである」と言うのを聞いて、全員興の冷めた顔をして、

申す人の方へ罷るなり」と云ふを聞きて、人々皆興の醒めたる兎をして、

「恐ろしいことをおっしゃる人だなあ。その童子とかいう者は、大江山に住んで

「恐ろしき事を宣ふ人かな。其童子とやらんは、大江山に住んで

人々や鳥獣を食べて、神通力が思いのまま、恐ろしい鬼神と聞いたが、あそこに

人民禽獣を食として、通力自在にして、恐ろしき鬼神とこそ聞きつるに、彼処

いらっしゃるとは全く知らない。物好きで命を捨てようとの事であるか。ひよっと

坐するとは更に意得ず。物好みして命を捨てんとの事なるにや。但し、

したら、あなたも同じように通力を身につけている不思議な人であるのか」と舌を

和殿も同じく通を得たる神変の人なるか」

振るわしておっしゃったところ、「いやいや、そう怖がらないでください。世間で

と舌振るひして宣ひければ、

噂されるほどのことでもございません。最初は大江山に住まっていたが、あそこは都が近いので、流石に王威を恐れ、同時に愛宕山の大天狗のせいで邪魔をされ、思いのままとならないことが多いと思って、以前からこっそり千丈が嶽に引きこもり、大江山には茨木という者に、数百人の悪党たちを付き従わせ城を守らせ、討手が下るならばあの城で邪魔をしようとするためである。ところが現在天下の武将・

討手下らば彼城にて遮らせんと為なり。

然るに当時天下の武将

源頼光が、討手の大将として下向なさるようだが、急に気分が悪いと言って向かう

源頼光、

討手の大将として下り給ふなるが、

俄かに心地悩ましきとて向かひ

ことがお出来にならず、途中から多田に帰りとどまり、頼光の息子の判官頼国とか

得給はず、

其子判官頼国とかや云ふ人

いう人が大軍を率いて、一昨日から攻められるといっても、城はしっかりして攻め

大勢を引率して、

城強くして寄せ手

寄せる軍勢は暇をもてあます様子である。この次第を急いで報告すべきために、今

退屈の体なり。

此旨注進すべきため、

すぐ参上し申し上げるのである」。

唯今参向仕るなり」

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

[酒顛童子の本性]

頼光はちょっとうなずき、「それにしてもその童子と申し上げたのは、どんな人が変化なされたのでおられるのだ。さぞかし不思議な変化を身につけなさっている

さこそ不思議の神変を施し給ふらめ

のだろう」。 「そもそもその正体は、越後国の何とかという者の妻が、妊娠して十

胎める事

六ヶ月で出産に臨むこととなる。苦しがることこの上なくとうとう生むことが出来

十六箇月にして産に臨む。

苦しむ事甚だしくて終に産み得ず、

ず、もがき苦しみ死んだ。母が死んでから、胎内から這い出て、生まれた日から上

悶え死にゝ死にけり。

手に歩き物を言うことは、四、五歳ほどの子供のように。多くの人々が不思議に思い怖がらないと言うものがなかったが、親子の愛情が捨てがたくて、五、六歳にな

父子の恩愛捨て難くて、

五六歳に成るまでは

るまでは育てていたが、その体つきは普通ではなく、戯れ遊ぶ冗談までも、全く人

育み置きしが、

其為人尋常ならず、

戯れ遊ぶ正な事までも、

間の仕業と思われなかったもので、父もさすがに恐ろしく思えて、結局奥深い谷の底

更に人間の所為とも見へざりければ、

父も流石に恐ろしく覚えて、

遂に幽谷の底に

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

に捨ててしまった。しかし狐や狼の害も無く、木の実を食べ、谷の水を飲んで育

棄てゝげり。 されども狐狼の害も無く、 木の実を喰らひ、 谷水を飲みて生長し、

ち、その背は八尺あまりで、力は満ち足りるほどしっかりしていて、それでいて外

其長八尺有余にして、 力飽くまで逞しく、

法_(巻)を完成し、ある時は土に人を溺れさせ（→埋め）、ある時は空中に身を据え、

然も外法成就し、 或るひは陸地に人を溺し、 或ひは空中に身を置き、

色々な術を行う。それゆえ眷属を集め、仲間に従って心を寄せ集まる者たちで、全

様々の術を成す。 されば同気相求め、 類に従つて靡き集まる者共、

員異類異形で、いずれにしても人間の種類とは見えない。しかし、童子のように通

皆異類奇形にして、 何れ人間の種とも見へず。 され共、 童子の如く

力は持っていないが、怪力で強く盛んであることは本当に並ぶものがないほどであ

通力は得ざれども、 怪力強盛なる事誠に無双なり。

る。そして童子が酒を好むことは度が過ぎている。一度に飲むことは、器がいつぱ

又童子酒を好む事法に過ぎたり。 一度に飲む事、 甕に満たざれば

いにならないと酔わない。酔ったところ転がりもだえ気絶して、通力がなくなり力

酔はず。 酔ひぬれば顛動悶絶して、 通を失ひ力を落とす。

が弱くなる。これによって、『酒顛童子』と呼ばれている」。

之に依つて、酒顛童子と呼べり」。

[頼光主従千丈が嶽へ至る]

保昌が申し上げて、「それでは、聞いていたよりも恐ろしいことでありました

「さては、聞きしよりも恐ろしき事にて候ひけるぞや。

か。とりわけ我々の規則と言うのは、役小角_(貳)の教えを受け、孔雀明王_(參)の教え

就中我々が行義と云ふは、役の小角の教へを受け、孔雀明王の法を修して、

を身につけて、叶うことはなくても空を飛ぶ通力がほしいと思う。また 廻国する

叶はざるまでも飛行通力を得んと欲す。又廻国する事も、

事も、恐ろしい心地に行き着き、身を鍛えるために大峰_(肆)や葛城_(伍)の頂に上り、

恐ろしき所にも至り、身を凝らさんが為、大峯葛城の頂に上り、

那智三重の滝_(陸)にこもり、色々な苦しい修行の結果を重ねている。それゆえ世間

那智三重の滝に籠もり、種々難行の功を積めり。されば世に

に恐れをなす大童子にお目にかかり申し上げ、目の前で測りがたい不思議な妖術

恐れを成す、大童子に謁し進らせ、目前に神変不測の妙術を見、

を見て、恐ろしい普通と変わった姿の顔つきを見るならば、山伏修行のよりどこ

恐怖異相の形粧をも見ば、山伏修行の便りと成らん。

ろとなるだろう。出来ることなら貴方には、私たちを連れて大童子に拝顔を許し

然るべくは和殿、

我々を具して大童子に見参を許し給はれかし」

てくださいよ」と望んだところ、その男は笑い出し、「貴方方は愚かなことを望ま

「旁々は嗚呼の事を望まるゝ者かな。

れるものだなあ。難行苦行も、命があって行えるのだろう。あの山にお入りになる

難行も苦行も、 命有りてこそ修すせらるべけれ。

彼嶽に入り給はゞ、

のならば、行くと同時に命を奪われ、理由もなき死を招かれることに疑いはない。

行くと均しく命を取られ、

故無き死を致されん事疑ひなし。

伯耆への道は私がお教え申し上げるのがよいから、ともかくも大山に参詣し尊いも

伯耆への道は某教え進らすべければ、

先づ大山に詣でゝ貴き事に

のに会ってください」と、全く許さない。綱は十分に聞き終えず、「愚かなことを

逢ひ給へ」

おっしゃる者だなあ。たとえ私たちが、仏道修行が未熟で童子によって失われれ

勤行未練にして童子の為に失はれば、

ば、それこそ捨て身の様である。不借身命_(漆)の仏の教えに従い、仏法のためには仮

其こそ捨身の行体なれ。

不借身命の仏説に任せ、

法の為には

にも命を惜しく思つてはいけない。なんとしても連れて行ってくださいよ」と強く

仮にも命を惜しむまじ。

是非具して給はれかし」

望んだところ、「それほどまでに思いなさるならば、門内までは一緒にお連れ申し上げるが、私は全くの下郎で、大童子の御前までは出ることがございませんので、

某は一向の下臈にて、

貴方方の拝顔のことは分からない」と言う。皆さんは大変喜んで、さらにその人の

旁々の見参の事は知らず」

尚も彼が

機嫌を取ろうと思って、色々と付き従い言うことによって進むうちに、その日の酉

気色に入らんとて、

様々の追従云ひ将て行く程に、

其日の酉

の刻ほどに、千丈が嶽の岩屋の前に着きなさる。その造りは、聞いたよりもたいし

の剋計りに、

千丈が嶽岩窟の前に着き給ふ。

其構へ、

聞きしよりも密しく、

たもので、険しく聳えている岩屋を登ること三里ほど、その道は聳え立って屏風の

峨々たる岩壁を上る事三里計り、

其道峙ち立って屏風の如く、

ように、露が多くて苔は滑らかだ。あるところではくずの根にしがみついては、片

露深ふして苔滑らかなり。

或ひは葛の根に取り付きては、

側が切り立って崖になったところを這い上がり、あるところでは松の枝を支えとし

片岸を這ひ上り、

或ひは松が枝を便りとしては、

ては、岩の角に足を下ろし、なんとかかんとか苦労し、上りきって頂上を見ると、

岩廉に足を下ろし、

左右艱苦し、

上り果て、絶頂を見れば、

あたり二町ほどもあるだろうかと見受けられる穴がある。この中に入ると、左右上

互り二町計りもや有らんと覺しき穴あり。

此内に入るに、

下全て自然の岩を切り穴をあけて道としたので、日や月光も見えず、暗くて行き先

左右上下皆自然の岩を切り穿つて道となしたれば、

日月の光も見へず、冥々として前途を

が分からず、ひっそりとして鳥の一声の囀りも聞こえず、これは果羅国^(捌)に向か

知らず、

寂々として鳥一声の囀りを聞かず、

是や果羅国に赴くなる

うと言う暗穴道の有様も、このようかと想像された。これを進むこと十町余りで一

暗穴道の分野も、

斯くやと思ひ遣られたり。

つの石門がある。柱や扉も全て石を掘ってそれを作り、ずっと閉ざしてそばに小さ

い穴が備えられている。その男はここから入り込んだので、皆さんも同じようにこ

彼男此より這い入りたる程に、

人々も同じ様にして

の穴から這いこみなさると、すぐさま温かな空気が身にしみ、風が生臭く吹いてき

此穴より這い入り給ふに、

忽ち暖かなる気身に入り、

風癩く吹き来たりて

てなんというわけもなく身の毛がよだった。これこそ、去年の秋から殺された、

そぞろに身の毛も豎ちけり。

是ぞ、去年の秋より害せられたりし、

人々や獣たちの骸骨と思われて、あちらこちらに積んでおいてある。その男が申し

人民禽獣の骸骨と覚えて、

此彼に山の如く積み置きたり。

上げて、「皆さんは少しの間お待ちください。私は中に入って報告の次第を申し上げ終えて、皆さんをお呼び申し上げます。それまでは必ず音も立てないでここに

其までは必ず音もせで此に坐せ」

てください」と言って、中門に入ってしまった。皆さんはかわるがわる目と目と見合わせ、ため息をつき、心の中では、「住吉・八幡の両社様、さらに加護を示してください」と願立てをしていらっしやった。

注釈

※壺・外法……本文では呪術や妖術の意。

※貳・役小角……役行者のこと。奈良時代の山岳修行者で、修験道の祖。

※参・孔雀明王……孔雀を神格化した明王。諸毒を除く。

※肆・大峰……奈良県吉野郡十津川東の山脈であり、修験道の根本霊場。

※伍・葛城……大阪府と奈良県の境にある山で、修験道の霊場。

※陸・那智三重の滝……「那智の滝」は東牟婁郡那智勝浦町にある滝。「三重」は滝が落ちる様が三筋に見えることか、もしくは「那智の滝」の近くの「青岸渡寺」に三重塔があるからか。

※漆・不借身命……仏法のためには命を惜しまずに捧げる事。

※捌・果羅国……未詳の国で、罪人が流される国とされる。

今回はとても長いお話ですので、三ページに分けますね。

さて、『前太平記』の酒吞童子退治で一番特徴的な鬼の案内人の登場です。彼が中々に面白い存在に感じます。彼のことも今後考察してみたいですね。

そして、この酒吞童子の出生の背景は、伝説のはじめである『大江山絵詞』から、最も広く知られる『御伽草子』までの定型的なものとは一変しています。大江山に酒吞童子が住みついた理由も、『大江山絵詞』などは弘法大師らに追放されたから、であったのに、こちらは愛宕山の天狗に追いやられ、都の威光を恐れたためと独特です。

私はこの『前太平記』の岩屋の表現がとても大好きです。『御伽草子』の岩屋の描写は、「瑠璃の宮殿玉を垂れ、薨を並べたておきり」、「なまぐさき風吹きて、雷電稲妻しきりにして、前後を忘ずる其なかに、」と、視覚・嗅覚・聴覚で表現していますが、『前太平記』はさらに触覚の表現もプラスされ、非常に生々しく描写されています。これには私は藤元がしっかりと『御伽草子』を意識して書いてるなど感じられてしまいます(笑)感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2017/7/24

改訂：2021/3

海熊童子